

# 水産試験場研究評価委員会 評価のとりまとめと機関の対応方針

(最終評価)

事業名 (課題名)	うなぎ増養殖技術試験 (大型ウナギ生産技術開発試験)			研究 期間	令和3～5年度 (3カ年)	予算 区分	委託
研究の成果	A. 目標を超えて達成    B. ほぼ目標を達成    C. 目標をやや下回った D. 目標を大きく下回った						
委員名	1	2	3	4	5	6	まとめ
評価結果	A	A	A	A	A	A	A
主な意見	<p>①研究目標の達成について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>研究の成果は実用に供され、普及し始めるレベルまで達したことで、大きな目標が達成されたといえる。</li> <li>生産技術が開発され、すでに実用化や普及に着手できている</li> <li>大型雌ウナギ生産技術が確立された。</li> <li>大型雌ウナギの生産技術を確立し実用化している。</li> <li>現場実証や普及に加え、ブランド化まで実施している。</li> </ul> <p>②成果の水準について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>シラスウナギ資源の現状を考えると、本研究の成果は実用的で安全性も確保されており、産業的にも極めて有益である。</li> <li>使用者に必要な知見が十分得られている。</li> <li>大型雌ウナギ生産技術が実用化され、品質も良く、有益である。</li> <li>当技術を実証試験を通して実用化し、高品質な大型雌ウナギを生産可能としたほか、その普及も図っている。</li> <li>チョウザメなど他の分野での応用が期待できる。</li> </ul> <p>③貢献度について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>開発技術の普及活動、食味試験、成果品の限定販売などが既に行われており、水産振興に十分貢献できる。</li> <li>シラスウナギ資源の低迷が継続しており、大型ウナギの開発は生産量の維持に直結すると考えられる</li> <li>ウナギ資源の有効利用や製品の品質向上に貢献する。</li> <li>当技術を実用化したことにより、ウナギ流通サイズの大型化による天然資源の有効利用に資することができる。</li> </ul> <p>④普及性について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ダイズイソフラボンの製品化も実現しており、普及できる可能性が非常に高い。</li> <li>養殖業者と共同で研究が進められており、業界の評価も高い</li> <li>費用対効果を数値で示すことが今後の普及の鍵となるであろうと思われる。</li> <li>ダイズイソフラボン製品の市販化による当技術の普及が期待できる。</li> <li>実際に普及している。</li> </ul> <p>⑤総合評価</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>天然資源であるシラスウナギの有効利用につながる大型ウナギ生産技術が、実用に供されるレベルまで開発されたことは非常に高く評価できる。今後、開発された技術が、様々な組織や企業間の連携等を通じて、生産現場で広く利用されるようになることを期待したい。</li> <li>養鰻業者に歓迎される技術開発であれば大きな成果である。今後も、本県養鰻業者の経営向上に資するべく、大型雌ウナギの需要が拡大するよう、マスコミ等を通して上手くPR等を行っていただくことを期待する。</li> <li>大型ウナギの生産技術開発だけでなく、今後実証される予定の生産向上にもつながる有望な技術と分かり、当初の目標を上回る結果であった。県下の養鰻業者が積極的に使用されるよう、研究を続けてほしい。</li> </ul>						

- ・大型雌ウナギ生産技術が確立され、しかも高品質であることが実証された。ウナギ資源の有効利用が図られるよう、標準的養殖方法を周知する等、今後普及が進むことが大いに期待される。
- ・大型雌ウナギの生産技術を確立し実用化しているうえ、試食会や限定販売等により当技術を広く周知している。今後、当技術による養鰻が拡大することにより、天然資源の保護・有効利用に寄与すると考えられる。
- ・大型メスウナギの生産技術が普及し、ウナギ資源の有効利用が進むことを期待する。メスウナギのみを養殖することは、世界で初めての試みとなる。試験的に行った養殖現場では、ビリウナギが少なくなるなど様々な副次効果が確認されている。今後、顕在化してくるであろう副次効果について、適宜、研究の裏付けをしていってほしい。

#### 機関としての対応方針

総合評価は「A」評価であり、目標を超えて達成したと判断する。

本事業は、養鰻漁業者と協力して行った実証試験や生産された大型雌ウナギの試食・限定販売等により、大型雌ウナギ生産技術等を実用化し、広く周知することができた。

今後は委員会の意見を受け、開発した技術や大型雌ウナギの普及拡大のため、積極的に周知を行うとともに、本研究で確認したダイズイソフラボンの副次的効果についての研究を進める。